

〔特別寄稿〕

近 親 相 姦 (Incest)

松 本 守^{*,**}

フロイトによれば, どんな人間でも近親相姦的衝動が見出されるという。それが幼児期には母親に対する性的欲求となり, 父親を性的競争者として憎悪するようになる。この競争者の力があまりにも強いため, 幼児は自己の近親相姦的欲求を抑圧せざるを得ない。しかし無意識のうちに抑圧された近親相姦的欲求は——たとえそれが病的な場合においてのみ激しく現れるとしても——大人になってからも隠然として残っている。言いかえれば母なる人や母なる人と同価値のもの——血縁や家族や種族——に結合したいという性向は, すべての男女に内在するものである。近親相姦的欲求は, 根本的には「性的欲求の結果ではなくて, 人間に内在する最も基本的な性向」のひとつだと見なされている。近親相姦的欲求が「人間に内在する最も基本的な性向」のひとつだとすると, 当然文学の素材として話題にされるのは必定であろう。

人類学では近親相姦禁忌 (incest taboo) の発生の原因について種々の見解がたてられた。遺伝的弊害と自然淘汰で説明しようとしたモルガンやエンゲルスの学説, マクレナン・スペンサーやラボックらの略奪婚起原説, エリスやウェスターマークの性心理学説, 婦女の交換という点から説明を試みるレヴィ・ストロースの説, 動物段階にすでに近親相姦禁忌の萌芽をみる今西錦司の生物社会学的学説などであり, 今日なお定説をみるにいたっていない。原始乱婚の仮説や, 未開人による近親相姦の生物学的弊害の認識の仮説などは, 今日の学界では受け入れられていない。むしろ家族生活の秩序維持, 親の権威維持という観点から近親相姦の禁止を説明しようとする説が有力である。近親相姦

の禁止のもつ意義は, 単に家庭内の秩序維持という点だけからでは, 十分説明できない複雑な面を持っている。この点に関してレヴィ・ストロースの説は興味ぶかい。彼によれば人類文化に普遍的な規制である近親相姦の禁止は, とりもなおさず人間社会と非人間社会すなわち動物社会との差なのであり, それが自然と文化との境界線であると説明している。

近親相姦をテーマにしたアメリカ文学の主な作品を分類すると次のようになる。

- 父子相姦 F. スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』
(*Tender Is the Night*, 1934)
- 母子相姦 ユージン・オニール『楡の木陰の欲望』
(*Desire under the Elms*, 1924)
- 兄妹相姦 ウィリアム・フォークナー『アブサロム, アブサロム!』
(*Absalom, Absalom!*, 1936)
- 姉弟相姦 ハーマン・メルヴィル『ピエール』
(*Pierre*, 1852)
- 順縁相姦 ウィリアム・フォークナー『熊』
(*The Bear*, 1942)

作家が創作の舞台を, 自分の生まれ育った土地に, 設営するようになって本物になるとはドストエフスキーの名言であるが, まさしくフォークナーもその一人である。フォークナーは生まれ育った南部を愛し, それ故に正面切って南部の現実と対決し, その歪みを

* 藍野大学医療保健学部看護学科教授

** 京都女子大学名誉教授

仮借なく批判した作家である。フォークナーは現代の南部社会にはびこっている無力と退廃と悪と暴力の姿をあますところなく浮彫りにするために、バルザックが『人間喜劇』において用いた人物再登場の方法を駆使して、神話の王国に似せた一つの郡をミシシッピ州に作り出した。それが、いわゆるヨクナパトゥファ・サーガ（神話）と呼ばれる一大連作へと発展する。フォークナーがこの連作の中で意図したのは、単なる特徴的事実や人物や情景を浮彫りにするという横の有機的な総体ばかりではなく、人間と社会とを動かす根源的な力にまでさかのぼり、現象的な表面の事実の底にひそむ悪の世界を浮き彫りにしようとする縦の有機的な総体でもあった。フォークナーはヨクナパトゥファ・サーガの世界において、奴隷制と南北戦争における敗北という二つの事実を、人類の原罪という観念に置きかえた。原罪の観念に裏打ちされたヨクナパトゥファ・サーガの創設によって、始めて〈近親相姦〉という重たいテーマを追求することが出来る。それは本質的に生命の根源に潜む問題であって、神話の装いと原罪意識との対決は不可欠の要素のように思われるからである。

〈近親相姦〉のテーマを現象的興味のみでとりあげたとしたら、それは文学の冒瀆ともなろう。そのことが、〈近親相姦〉を扱った日本の作家が、遠くトーマス・マンやフォークナーの領域におよばない原因にもなっている。たとえば島崎藤村の『新生』における岸本は、姪の節子との〈近親相姦〉の原因を、「孤独に胚胎した毒」であったと自己弁護し、恥辱と世間体を異常に恐れている。岸本の行動は、一貫して自己の内部（原罪）との対決ではなく、外部（世間）との対決に終始している。その結果〈近親相姦〉のもたらす暗さと罪の意識が、主人公にも作品全体の色調からも感じとれず、卑猥さと憤りを読者にあたえる。嬰兒をロッカーに棄てたり、自分に不都合な人間をコンクリート詰めして抹殺してしまう日本特有の現象も、原罪意識との対決よりも、恥や外聞を重要視する日本人の精神構造にも原因の一端がありはしないだろうか。

フォークナーは、人間の悲劇は高い衝動と低い衝動との葛藤から生まれ、善に対する潜在力と悪に対する潜在力との共存から生じてくるとし、この二つの潜在力を彼の野心作『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929)の中ですさまじいほど対立させている。『響きと怒り』のケンティンは、母に求めて得られなかった愛情を妹キャディーに求めたが、彼女の純潔の喪失によって、激しい嫉妬と絶望感にさいなまれる。

彼は「妹のからだを真に恋しているのではなくて、それにかかわる処女性の観念」と恋に陥っていたに過ぎない。コンプソン家の名誉が、妹の処女性のしるしであるこわれやすい薄膜によって、つかの間に支えられているにすぎないという観念を愛したのだった。錯綜した彼は、近親相姦妄想の暈につつまれて、「お父さん、僕は近親相姦の罪を犯しました」と虚言を吐いて、キャディーに心中をせまる。近親相姦の罪によって、自分と妹とを地獄に投げこみ、永却に燃えさかる火のなかで、永遠に彼女をまもり無垢に保つことが出来るという考えにとりつかれていたが、結局一人で自殺してしまう。

ケンティンの自殺の動機は、母親に対する感情と半ば恋人の感情にも似た親近感を抱いていたキャディーが、他の男と結婚することによってすべての愛を失う事に起因する。フォークナーの不毛な世界は、その主人公達を死に追いやるが、その背後には、さらに大きな暗い過去の世界があって、彼らの死を一層徹底したもの、不可避的なものにしていく。ケンティンの運命論的な考えの底には、原罪の観念があり、南部の過去が蔓延している。

キャディーは七才の時、禁じられた部屋の窓を覗くために、豊かに繁ったリンゴの木に登っている。兄弟達は下でワイワイ騒いで、彼女の汚れたズロースを眺めている。彼女がリンゴの木に登る前に、一匹の蛇が部屋から這い出し、ディルシーが「この悪魔め！」と叫んだ。キャディーは、まさしく〈イヴ〉にたとえられている事は明らかである。キャディーの純潔の喪失を軸として、コンプソン家は崩壊する。コンプソン家の崩壊は、その背後に南北戦争以後の南部そのものの荒廃を象徴している。

ケンティンの近親相姦の意識は、『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936)におけるボンと異母弟ヘンリー及び異母妹ジュディスとの奇妙な三角関係へと発展する。ボンはサトペンが一旗掲げる為に西インド諸島に渡った時、フランス人の血統を持つ砂糖農園主の娘ユーラリア・ボンに生ませた子である。ユーラリアに黒人の血が流れている事を知ったサトペンは、結婚四年目に二人が一生食っていきけるだけの金を残して、妻子を捨ててしまう。その後、コールドフィード家の娘エレンと再婚する。それは彼女を愛していたからではなくて、コールドフィード家の名誉と地位に魅力を感じたからである。そして生まれたのがヘンリーとジュディスである。一方女の執念

にとりつかれたユーラリアは、南部の田舎大学であるオックスフォード大学に通学しているヘンリーに、息子ボンを近づけるために入学させる。ユーラリアの計画通り、二人は親しくなり、ヘンリーは休暇中にボンを招待して、ジュディスに引き合わせる。ボンとジュディスが実際に会ったのは、婚約期間のまる一年を含めても、三回だけである。合計十七日間にすぎない。それも誰かそばについている話である。それにも拘らず、ヘンリーは二人の関係を「純粹にして完全なる近親相姦」だという。しかも自分とボンとの関係もそれに似たようなものだと考えている。ヘンリーは、妹の処女性は破らなければならぬのもと考え、自分が理想としている人物であるボン、理想の夫であるボンが、その処女性を奪うべきであり、もし自分が妹、情人、花嫁に変身することができたら、喜んでボンから処女を奪ってもらおうだろうと考えている。

ジュディスは、純粹無垢な人間性の持主として、苦しめられ、迫害されつつ、聖女のような生き方をする。彼女はボンの死後、寡婦の如き生活を送り、ボンの情婦の混血女が死ぬと、孤児となったボンの息子を引き取って育てた。その後ボンの息子が黄熱病にかかると、必死に看病して自分も感染して死んでしまう。彼女は兄との〈近親相姦〉によって厳しい試練を受け、尼として施しをし、断食をしてむき出しの岩の上で祈禱やわが身の折檻につとめて、聖女と讃えられるようになったトーマス・マンの『選ばれし人』における主人公ジビュラを髣髴させる。だがジュディスとジビュラの間には、決定的な違いがある。ジビュラの生涯は、罪と容赦ない贖罪であり、その終わりは神の恩寵による変容という基本的な原罪の意識につらぬかれている。一方ジュディスの行動を操るものは、呪われた運命である。彼女自身、自由意志を持っていると信じながら、運命の環から逃れ出ようと悶え苦しむのであるが、結局のところ運命の召使となり、どうすることも出来ない。彼女は運命のおもむくままに行動し、その虜になっている。

『アブサロム、アブサロム!』では、〈近親相姦〉そのものに対する罪の意識は芽生えていない。ユーラリアの復讐によって、コールドフィールド家が崩壊する姿が浮彫りされるにすぎない。『アブサロム、アブサロム!』から六年後に出版された『熊』(The Bear, 1942)では、主人公が〈近親相姦〉をした先祖の罪をあばき、それに苦しみながら罪の償いをする良心的な苦悩の姿がみられる。マッキヤスリン家の土地台帳

から、アイザックは祖父キャロザーズがユーニスという黒人奴隷のトマシーナ、通称トミーという娘を産ませたのみか、その実の娘トミーと〈近親相姦〉をしたことを知る。クリスマスの日に、ユーニスが河で投身自殺した謎が解ける。祖父とトミーの間には、トミーのテレルと呼ばれた息子が生まれるが、母親のトミーは産褥にて死亡する。アイザックは、祖父の血をひいた黑白混血児の孫達の行末を考えて、精一杯の補償をしようと努力する。ルーカス・ビーチャムには、マッキヤスリン家の農園の一部十エーカーの土地の所有権を与え、ながい旅行の末、北部の黒人と駈け落ちしたフォンシバをやっと捜し出し、彼女にも祖父の遺産の分前を与える。テネシー州に逃亡していた、もう一人の孫娘テニーのジムは、『デルタの秋』(Delta Autumn, 1942)で七十才を越えたアイザックの眼前に、突如として現れた。老齡に達したアイザックは、彼女にいくばくかの金と由緒ある角笛を与えて、北部に帰って黒人の男と結婚することを勧める。「出て行ってくれ。わしには何にもしてやれん。誰にしたってあんたには何にもしてやれんのだよ」と沈痛な表情で訴え、当分の間はそうすることが最善の方法であると、苦しい説得をしているに過ぎない。神は、この新世界が「お互い同志の謙譲と憐れみと寛容と誇りの中」に一つの国家として、建設されることを強く望んだ。「これらの徳目は、南部の雑婚や近親相姦の実態に直面したアイザックがすがりついた夢である」(The Major Year, 1966)とメルビン・バックマンは強調している。

フォークナーの作品での〈近親相姦〉は、深く南部の過去に根ざしている。注目すべきことは、〈近親相姦〉のなかにも厳然と人種問題が入り組んでいることである。このことはアメリカ文学の中にあっても、フォークナーのみに言える特徴である。

『熊』の第四章を流れている命題は、基本的な原罪の観念である。人間は善と悪の両面を体現している。だが、人間はすべて「憐れみと謙譲と寛容と忍耐」をもって人生に対処すれば、人生の栄光を得ることが出来るとフォークナーは考えているのでは決してない。人間がしなければならぬことは、善悪両面の矛盾と相剋に苦しみながらも、少しでも良心的な行為をとろうと努力することである。現実主義に徹するマッキヤスリンは、アイザックの行為を「それは逃避だ」と批難したが、アイザックの生き方こそフォークナーが高く評価する人間の姿であり、人間の潜在力に対するわ

れわれの観念を高めてくれる。『熊』に至るまでのフォークナーの作品には、ドストエフスキーと異なって、罪はあっても救済がないといった論が聞かれるのも無理からぬことであろう。『熊』以後、フォークナーは人間性の善と、更に善の究極の勝利への確信を唱え出した。彼は、ノーベル賞受賞演説で、「私は、人間が勝つであろうと信じます。」と宣言した。人間は悪の可能性だけではなく、善の可能性も持っている、人間の過去の歴史は未来への意志と情熱によって変える事が出来るとして、人間は宿命との戦いを永遠に続けるべきであると言っている。人は悪に対して耐え忍ぶだけであったのに、打ち勝つのみならず、更に不滅の魂を説くようになった。

フォークナーの〈近親相姦〉は、ギリシャ神話以来、〈近親相姦〉のテーマに挑んだどの作家とも違った様相を呈している。アメリカ文学の中にあっても、異色の存在である。

メルビルの『ピエール』(*Pierre, 1852*)は、〈姉弟相姦〉をテーマにした作品である。この物語は、亡父の隠し子イサベルの突然の出現によって進行する。ピエールは神聖で汚点のない人間として尊敬されていた亡父の名誉を傷つけず、熱愛していた美貌の母グレンジング夫人の誇りも奪わないで、なお不幸な境遇のイサベルを救おうと決定的な行動に出る。愛する婚約者ルーシィと別れて、異母姉イサベルと偽りの結婚をして、この難局をきりぬけようとする。だがイサベルの幻想的な魅力にひかれて、ついに〈姉弟相姦〉を犯してしまう。グレンジング夫人は、悲しみと怒りのため狂死する。ピエールは俗物達の中で孤立し、ついに善と悪の曖昧さに行きあたり、真理や徳や運命に酔っている自分に愛想を尽かして服毒自殺してしまう。

〈母子相姦〉をモチーフにした『榆の木陰の欲望』(*Desire under the Elms, 1924*)はオニールの創作過程の第二期に属する傑作である。母恋しさと父への復讐は、表裏一体をなして主人公エベンの心に働きかける。母は大地に根をおろす榆の木であり、子供を生き育て慈むものである。一方、父は家族を支配し束縛する石垣である。母は大自然そのものであり、父はその大自然を破壊しようとするちっぽけな人間の力である。それ故に母には愛情と畏敬の念を持ち、父には憎悪と反抗を向けなければならない。父に酷似し、形骸化された家庭生活にしがみついているエベンは、自然のままの欲望をむき出しにする継母アビーに必死になって抵抗するが、結局アビーの欲望に押しまくら

れ洗脳されてしまう。アビーが愛の証しをするため嬰兒殺しをしてまで、エベンの愛をつなぎとめようとした時、エベンは大いに立腹して警察に電話する。だが警官が駆けつけてくると「おらもぐるだ」と主張し、晴々とした表情でアビーと共に刑場へ行く。

フィッツジェラルドの『夜はやさし』(*Tender Is the Night, 1934*)のニュル・ウォーレンは、〈父子相姦〉によって精神分裂症になる。1930年代というアメリカにおける物質文明の勃興期にあって、何不自由ない大富豪の娘ニコルが、最後に父親に求めたものは富でも名誉でもない。どこの家庭にもあるありふれた父性愛に過ぎない。〈父子相姦〉をしてまでも父を慕っていたニコルは、自分は父親にとって「縫いぐるみの人形」に過ぎないことを知って、絶望し、悩み、ついに精神分裂症になった。

フォークナーの作品での主人公は、〈近親相姦〉によって、発狂したり、自殺する自由もない。発狂したり、自殺したりする仕合わせを持てるのは、白人の世界の出来事にすぎないのか。『熊』の黒人奴隷ユースが自殺したのは、白人の主人が実の娘トミーと〈近親相姦〉をしたことではない。一個の人格ある人間として認められなかったことに対する死の抗議であった。『アブサロム、アブサロム!』におけるヘンリーは、妹ジュディスと異母兄弟ボンとの結婚が〈近親相姦〉になるから反対したのではない。むしろ異母兄弟ボンに黒の血が流れていることを知らされるまでは、自分が理想像として敬愛している異母兄弟ボンが、妹ジュディスと〈近親相姦〉することを望んでいる。ヘンリーは〈近親相姦〉までは許すが、種族混合は絶対に避けねばならぬと決意してボンを射殺する。

フォークナーの作品での主人公達は、〈近親相姦〉によって誰も死にはしない。フォークナーの描く〈近親相姦〉は人種問題を地模様にしたユニークな様相を呈している。「黒」であるという宿命が人生を決定する人間の生き様を執拗に追い求める格好の素材として、フォークナーは〈近親相姦〉のテーマをとり入れた。フォークナーは白痴の意識の世界や〈近親相姦〉のテーマを追求することによって、人種問題の本質のみならず、南部の悪ひいては人類の悪を浮き彫りにすることが出来ると考えたのである。人間の本性や人間の存在のあり方を問いかける〈近親相姦〉でさえも、払拭されてしまうフォークナーの人種問題に対するのめりかたに舌を巻く思いである。

参考文献

- 1) 井上博嗣編. アメリカ文学における夢と崩壊. 大阪：創元社；1988.
- 2) 大橋健三郎. 「物語」の解体と構築（フォークナー研究 2）. 東京：南雲堂；1979.
- 3) Cargil O eds. O'Neill and his plays - a survey of his life and works. London: Owen; 1962.
- 4) Brooks C. William Faulkner - toward Yoknapatawpha and beyond. New Haven: Yale University Press; 1978.
- 5) Callahan JF. The illusion of a nation - myth and history in the novels of F. Scott Fitzgerald. Urbana: University of Illinois Press; 1972.
- 6) Thompson L. Melville's quarrel with God. Princeton, N.J.: Princeton University Press; 1952.
- 7) Werner SA. The American dream in literature. New York: Scribner; 1970.